

会報一月号 子供「武士道」中編

目次

- ・ 義（公義）
- ・ 勇
- ・ 仁
- ・ 礼
- ・ 誠（信）
- ・ 名誉
- ・ 忠義
- ・ 克己
- ・ 慮（智）

今回は、子供「武士道」の中編です。紹介する武士道の代表的な九つの徳目は、一つ一つ独立しているのではなく、義から順番に繋がりが積み重なり合い混ざり合い、一つになって精神を構築していきます。

今回は「礼、誠、名誉」の三つです。

参考になっているのは、新渡戸稲造「武士道」です。

前回の復習から入ります。

一、義（公義）

・ 義とは、人として正しいこと。正しい道。造化と一体化すること。自ら正しいと信ずること。必ず持っていないければならない心。

・ 義が無くては気骨のない人間になってしまう。

・ 自分の損得より正義(道理)。人のため、全体のために、長期的・多面的・本質的に考える。

・ しかし、そこに仁(思いやり)がなければ、自分の正義の押し付け。正しさと、相手への思いやりを両方考えて、「中(進歩・発展)」へ向かわせる。

二、勇

- ・ 正しいこと、やるべきことが分かるのが「義」、それを行動に移すのが「勇」。
- ・ 勇とは、気力が強く勇ましい心、思い切りが良い態度。
- ・ 義の為に行われなければ、どんなに勇ましい行動に見えても、それは勇ではない。
- ・ 義を見てせざるは勇無きなり

・ 自分の力だけではできない時は、大人に助けを求める。これも立派な勇氣。
※挫けそうになった時に勇氣を出すには、

- ① 歯を食いしばれ
- ② 拳を固めろ
- ③ 足の指も曲げて握りこめ
- ④ ケツの穴を締めろ
- ⑤ 下っ腹も固めろ。もっと強くもっと強くもっと強く！これで気合が入り、立ち向かう勇氣が出てきます。そもそも物事というのは、自ら踏み込んだ方が簡単に片付くものです。

三、仁

- ・ 仁とは、人間同士の根本的なルール。人を思いやり、受け入れ、許す心。人を大切に思うこと。
- ・ 仁は、人の上に立てば立つほど必要となる。
- ・ 仁とは、万物を生成化育するプロセスすべて（出会う↓認める↓許す↓繋がる）を包含する徳

まとめると、「義（人としての正しさ）」を「勇」気を出して行く。これが人としての行動の原則です。その中で「仁（相手への思いやり）」を忘れないこと。これが前編の眼目でした。

今回の中編では、「礼、誠、名誉」の三つについて、一緒に学びます。

四、礼(愛)：「悲しむ者と共に悲しみ、喜ぶ者と共に喜ぶ」

①基礎

- ・ 礼とは単に礼儀作法の形をいうのではありません。心が伴わなければ「虚礼」と言って、相手にとって失礼(無礼)非礼な振る舞いとなってしまいます。
- ・ 悲しみも喜びも分け合い、相手を思いやる気持ちを形に現したものを、それが礼です。

- ・ 礼は、社会の営みを円滑にするルールを形にしたものです。
 - ・ 尊敬する気持ちを表すことです。
 - ・ 礼と言えば、すぐに「挨拶」や「お辞儀」を想像することができます。
- 挨拶の「挨」には、心を開くという意味があります。そして「拶」には相手に迫る

という意味があります。つまり、自ら心を開いて相手に迫り、お互いがぴたり合う、一致する、一体感を持つ、これが挨拶の本義です。「挨拶痛み入ります」という言葉の意味は、相手の痛いところ、痒い所、肝心のところにピタッと来る挨拶だということです。

「お辞儀」は相手を敬うことでもあるのですが、それは二番目の意味です。一番目の意味は、「自分自身を敬することです。つまり、自分自身に対してお辞儀しているのです。「吾を以て汝を敬し、汝を以て吾を敬す」です。つまり、自分が相手に敬意を表すと同時に、相手を通じて自分が自分に対して敬意を表す行動でもあるのです。動物はお互いが出会ってお辞儀し合うことはありません。それは、自らその価値を尊重すること、思いやること、尊重し合うことを知らないのです。

・礼は仁（人を思いやる心）を形にしたものですから、必ず仁の心がその奥になければいけません。勇のところ、勇の奥には必ず義がなければなりませんと学んだのと同じ構図です。だから、義のない勇は勇ではないように、心（仁や敬）のない礼は礼ではないのです。形だけお辞儀してよしとするのは違います。徳目は一つだけで完結することはありません。

・礼とは、お互いが気持ちよく過ごせるように考えて、それを行動にすることです。
・礼とは、悲しんでいる人がいたら、その人の悲しみを思い、喜んでいる人がいたら、その人の喜びを思うことです。

・礼は自分を大切にすることです。
・礼は愛です。

②応用

・相手への品物を「つまらないものですが」と言って渡すのはどうしてでしょうか。「つまらないもの」を贈るのが、仁の心を形にした礼なのででしょうか。そもそも、造化（大生命）の分霊として私たちひとりひとり存在しています。であれば、相手の存在も比類なき大切なものなのです。ですから、どんなに素晴らしいものを贈ったとしても、相手の素晴らしさには敵いません。「つまらないものですが」は、「あなたの存在の尊さに比べれば、どんなものでもつまらないものですが、ささやかながら私のお礼の気持ちを受け取って頂ければ嬉しく思います」を省略した、相手を引き立てる言い方なのです。

・外国のお話ですが、食事の時にあるお客様が、フィンガーボウル（指を洗う水が入った器）の水を、飲んでしまったことがありました。表面上はマナー違反です。もしあなたがそれを見たら、どうしますか？食事のマナーを知らないやつだなあと笑いますか？無視しますか？間違っているよと指摘しますか？それとも、そのお客様と同じようにフィンガーボウルの水を飲みますか？それ以外の行動をとりますか？皆さんで考えてみてください。人間同士であれば、最も根本のルールは仁なのです。そして、その仁を形にしたのが礼なのです。正しい答えと優しい答えをどう一致させるのか、それがその人の腕の見せ所です。それを、美しいとか粋と呼びます。

・「礼を以て端座すれば、凶人剣を取って向かうとも害を加うことあたわず」↓
れくらいにまで威厳が備わり、隙の無い形に高めることができます。礼を通じて平常心が養われます。しかし、残念ながら、世の中には道理の全く通じない相手、通り魔もいるので注意も必要です。

・克己復礼↓我欲を去り、礼儀正しくすれば、それは仁（造化、思いやり）となり愛となります。つまり、人としての本来の心に立ち返ることができます。その心で生きていくことが、自己の実現、和親共栄には不可欠なのです。

③実践

・雨の日に、狭い歩道などで傘を差しながらすれ違うにはどうすればよいでしょうか。すれ違う相手に傘がぶつかったり傘がかからないように。相手と反対側に、自分のさしている傘を少し傾けます。これを応用すれば、狭い場所ですれ違う時は、お互いが少し肩を引いてぶつからないようにできます。相手をよけないのは、偉い人ではありません。

・茶道等、芸事の作法は考え尽くされています。まずは素直に形を体に覚え込ませるから、その形の理由や意味を考えてみましょう。

・なぜ挨拶をするのでしょうか。挨拶をした時としない時、人から挨拶をされた時とされなかった時、どんな気分、気持ちになりますか。

・他に人がいない自分ひとりの時、どう振舞いますか。自分自身に対する礼（仁）を無くしていいのですか。

④発展

・今日、お父さんお母さんや兄弟や友達へ、思いやる心を形にしましたか。どんな風に振る舞いましたか。それは礼でしたか。

・試合に勝ったら、相手の気持ちを考えずに大喜びしていいのですか。また、試合に負けたら、相手の気持ちを考えずに泣いたり悔しがったりしていいのですか。相手を無視して自分の感情を表すのは恥ずかしいことです。でも、ご両親や友達の前では、喜びは素直に表したいですね。また、どうしても辛かったり悲しかったりして我慢できなければ、その気持ちは相手に伝えたいですね。

五、誠(信)：「武士に二言はない」

①基礎

・武士は一度口にした事は必ず実行します。武士にとっては最初に口にした一言が全てで、前に言ったことと違うことを言う「二言(前に言ったことを否定したり、全然違うことを言うこと)」はありません。

・誠とは、言ったことを立派にやり遂げることです。

・誠とは、本当のことです。

・誠とは、我欲や私利私欲や誤魔化すことをしない心です。

・誠とは、素直で真面目な心です。

・「をやる、へに行く、をしない、を止める」等は全て自分との約束です。それを破ってはいけません。なぜなら、約束を破ると人から信頼されなくなってしまうし、自分に自信がつかないし、やがて自分のことが嫌いになってしまいます。

・約束を守らないということは、相手や自分に嘘をつくことであり、騙すことです。「信なくんば立たず(論語)」と言われるように、人から信頼されなければ、世の中で役に立っていくことはできません。

・誠の人の言葉には力があります。

②応用

・「武士の約束に証文はいらない」↓武士は誠の人なので、武士がする約束を書いたり、契約書にする必要はありません。

・「富の道が名誉の道ではない」↓沢山お金を稼ぐことと、それが名誉なことかどうかは、また別のことです。「名誉」については次に学びますが、お金を稼ぐことについて一言話しておきます。お金とは何でしょうか。お金には様々な意義がありますが、忘れてはならないのは、お金は、社会に貢献した(喜ばせた)結果、社会からの「感謝(ありがとう)」が形になったものだということです。ですから、お金をたくさん稼ぎたいなら、多くの人に喜んでもらう必要があるということです。

・三省(われ日に三度わが身を省みる)↓人の気持ちになって真剣に考えることができましたか、友達に対して嘘をつきませんでしたか、よく知らないことを適当に人に話してたりしませんでしたか。

・誠を以て一日過ごしたかを毎日振り返る必要があります。一つの方法として、日記をつけることはとても有益です。我欲(臆病・怠惰・傲慢な心)を去れば、本心(誠)が自ずから輝き出します。

③実践

・自分のやるべきことを、小さなことから構いませんので、口に出して言ってみましょう。例えば、目が覚めたときは「よし、すぐに起きて顔洗うぞ」。口に出したことは自分との約束です。すぐにやりましょう。「言う」↓「すぐやる」。この繰り返しで、自分の誠の心が養われてきます。小さなことができない人に、大きなことは任せられません。

・「宿題をやらなければ」と思いながら、テレビやスマホ、タブレットをいじっているのは誠の人でしょうか。

・困った時は、正直になって誠の心で解決するしかありません。

④発展

・論語に「民は之に由らしむべし、知らしむべからず」(為政者の施政の道理を人民皆にきちんと知ってもらうことは不可能である。だから、「あの人のやる事ならば」と信頼してもらえぬ人格をまず備えなければなりません)とあります。信頼される人(誠の人)にならないと、みんなが協力一致してやらなければならないような大きな仕事はできません。

・自分の出したアイデアを形にするには準備が必要です。アイデアを出したら終わりではなく、自分が率先してその準備を始めることで、人からの信頼が徐々に得られて、みんなに協力してもらえようになります。

・誤ったら、まず反省して、我欲を去り、道理に立ち返り、今までの自分を改めて、丁寧に正確に明るく取り組みます。

・言ったことを守らなかつたり、始めたことを途中で止めてしまうことも実際にはあります。それが許させる場合も例外的にあります。それは、自分が義(人として正しいことを行うこと)に従っているということです。

・「誠は天の道なり。これを誠にするは人の道なり(中庸)」と言われるように、誠はこの宇宙の秩序を司る原理原則です。この原理原則を明らかにして、自分たちがそれを実践して様々なことを成し遂げていくこと(造化)が、人の務めです。

六、名誉：「名こそ惜しけれ」

①基礎

・名誉とは、評判がいいこと、有名なこと、世の中や周囲から尊敬されること。但し、人から誉められることを目標にするではありません。人からの評判を気する必要はありません。名誉とは自分の心の中にあるものなのです。「自分が誇らしくなることをする」、それが名誉です。

・何より名誉が大切です。名誉の反対は「恥」です。清らかで恥を知る心を「廉恥心」と言います。

・恥ずかしくなるようなことはしないこと。もし名誉なことをすれば、家族みんなが名誉に思う。しかし、もし恥ずかしいことをすれば、家族全員が恥ずかしい思いをする。

・恥とは何でしょうか。人から笑われることが恥なのではありません。自分との約束を守らないこと、自分に与えられた役割をきちんと果たさないことが恥なのです。

②応用

・「ならぬ堪忍するが堪忍」「鳴かぬなら鳴くまで待とうホトトギス」「武士は食わねど高楊枝」。忍耐や我慢の大切さを教えています。

③実践

・電車の中で席取りをするのは誰の為ですか。

・箸を使うのが苦手な人がいます。その人は自分の好きなように使えばいいという意見をどこかで聞いて自己流で使っています。正しい箸の使い方は、その方法が使いやすいくて美しいからです。自己流がそれに勝ることはほとんどありません。

・テストで悪い点の答案をどうしますか。点数が低いことが恥ずかしいのではなく、テストのために努力をしなかったことが恥ずかしいのです。

④発展

・コンクールで金賞を取ったり、競技会で優勝したりするのは名誉なことです。自

分にも家族にも祖先にも学校にも地域社会にも我が国にとっても、そしてその時代にとっても名誉なことです。ただし、結果が誇り、名誉なのではなく、「努力を怠らなかつたあなた」が、みんなの誇りなのです。

今回はここまで。

<p>【礼】 ・仁義の心を形にしたもの ・共に喜び、共に悲しむ ・機嫌良くいる</p>	<p>【誠/信】 ・言ったことを成し遂げる→武士に二言はない ・すぐに取り掛かる</p>	<p>【名誉】 ⇨ 恥 己の役割を果たし、自分を誇らしく思う心 廉恥心</p>
<p>【仁】 造化の始まり→人を思いやる/許す/受け入れる心</p>	<p>子供武士道 目的: 君子たれ</p>	<p>【忠義/忠孝】 所属の場/組織を一番に考え、自分は二番</p>
<p>【勇】 義を行う→勿論、正しいと思っただ行動が全て良い結果になるとは限らない</p>	<p>【義/公義】 正しいこと→勿論、正しいと思っただ行動が全て良い結果になるとは限らない</p>	<p>【克己】 【智/慮】 ・異心→本心へ立ち返る ・己を以て人をはかるな</p>